

新九郎通信



発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
e-mail: kinoshita@iseji.net

今年初めて松茸ご飯を食べました。カナダ産とはいえ季節感のある食卓は心躍ります。行楽の秋本番。皆様はどんな秋を楽しまれるのでしょうか。
平塚美術館「堀文子展」は ようこそ平塚美術館でおなじみの勝山滋さんの企画です。公立美術館初ということもあり、連日多くの方で賑わっています。70歳で単身トスカーナ暮らし、80歳でブルーポピーを探しにヒマラヤへ、92歳の今も大磯の自宅で一人暮らしをしながら新作の制作に励んでいる堀さんの作品からは、情熱を持ってものを見る目と心を持つことの素晴らしさが伝わります。初期の作品から新作まで80点。23日までです。新九郎では、たっぷり映像とお話で「プラド美術館」を案内する企画があります。お気軽にご参加ください。

新九郎 11月の展覧会のご案内

近隣・友の会会員の展覧会情報

会期・展覧会名	見どころ	会期・展覧会名	見どころ
11/3(水)~11/8(月) 小澤善虹日本画展	花鳥画、風景画、30点 新九郎2回目の個展となります	11/3(水)~11/8(月) 第61回穂真書道会選抜展	飛鳥画廊 0465-24-2411
11/11(水)~11/15(月) ラ・パレット油絵展	鉛筆で考え、絵の具で遊び、マティエールを楽しむ。油絵、水彩画	11/10(水)~11/15(月) 第8回デコパージュ&シャドーボックス展	飛鳥画廊 0465-24-2411
11/17(水)~11/22(月) 齊藤四郎・貴美子二人展	結婚50周年を記念して、絵と短歌の二人展を開催することにしました。	11/17(水)~11/22(月) 豊島シズ枝米寿展	飛鳥画廊 0465-24-2411
11/18(木) 新九郎デッサン会	コスチューム・アマチュアモデルです。2時間固定ポーズ。会費1500円	11/4(木)~11/8(月) 弘耀会日本画展	ツノダ画廊 0465-22-4263
11/20(土) 西洋美術史セミナーⅡ	アートナビゲーターが解説する「スペインプラド美術館の魅力」	11/11(木)~11/15(月) 高橋征四郎さざ絵展	ツノダ画廊 0465-22-4263
11/24(水)~11/29(月) ごらくトンボたち2010	金子豊(紐猫) 柴田逸子(絵画) 高橋恵美(絵画・CG) 矢野英美(絵画・石猫) 瀬戸嘉枝展(写真・書)	11/3(水)~11/8(月) 陶和会	アオキ画廊 0465-23-5624
<h3>ようこそ平塚美術館</h3> <p>平塚美術館学芸員 勝山 滋</p> <p>「堀文子展」10/9(土)~11/23(火)月曜休館</p> <p>今回開催の堀文子展は、初日まで一カ月を切って新発見の出品作品が出、図録の追加やNHKの取材など異例づくめです。この『猫』は1950年代の作品で、実際に動物を飼って観察して描いた堀文子らしく、小鳥をつかまえて野生の顔をのぞかせる猫の「ダリ」を描いています。堀作品には、生と死を感じさせ、それでいて暗くならない特長があり、そうした典型作といえます。小さく愛らしい微生物や貼り絵の世界に遊ぶ近年の画風と違って、堀芸術のイメージを変え、現代日本画史のなかで位置づけることができると考えています。</p>		11/3(水)~11/8(月) 中村和子展(油彩)	お堀端画廊 0465-23-7819
		11/10(水)~11/15(月) 加藤恵美子パステル画展	お堀端画廊 0465-23-7819
		11/24(水)~11/29(月) 笹村カヨ子彫刻展	お堀端画廊 0465-23-7819
		10/30(土)~11/14(日)月火休 四竈公子展	すどう美術館 0465-36-0740
		11/3(水)~11/28(日) 陶・浅倉貴子×山野草・村上敬	寄 荷風 0465-88-3021
		11/11(木)~11/16(火) 近藤満丸個展(グラフィック・紙版画・絵皿)	寄りあい処こうづ 0465-47-0933
		11/1(月)~11/29(月)火休 しゅんこう和紙ちぎり絵展	はげ八鮎 0465-22-0945
		11/6(土)~11/15(日) 望月通陽展 染・ガラス	うつわ菜の花 0465-24-7020
		11/27(土)~12/6(日) 細川護光 焼物	うつわ菜の花 0465-24-7020



パリだより

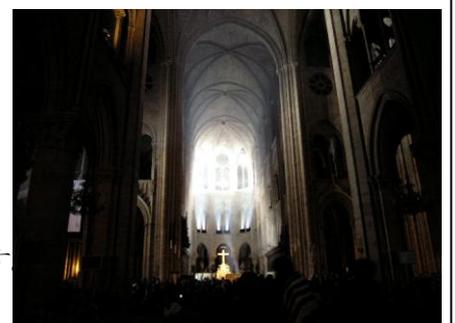


横井山 泰 パリ在住

10月のパリは芸術だらけ。2日夜7時から翌3日朝7時まで、一晩かぎりのアートイベント「ヌーブランシュ」が行われた。パリ市全面サポートで、市内の教会、病院、役所、劇場などに作品を設置、観客はオールナイトで各会場を巡る。というもの。ノートルダム寺院内では、一定の時間で光が強弱するインスタレーションだった。荘厳な空間の中で、昼間の様な明るさと祭壇の蝋燭さえ眩しく感じる感覚に、平家物語の冒頭を思い出した。シテ島とサンルイ島を結ぶ橋はクラブと化していた。橋全体にキューブが積重なり、全てスクリーンになっていた。サムソン電機の新製品、新技術のPRのようだ。深夜1時過ぎ、芸術無法地帯のお祭り騒ぎの中、各施設を廻る。警察、清掃局など警備は万全ながら住宅街への騒音も激しい。パリの懐の深さを感じた。小田原でも年に一晩いかがだろうか？21日ー

24日はFIAC(世界三大アートフェア)がグランパレで行われた。VIPでない我々は1時間並んで入場。現代美術の巨匠の新作を肌身で感じる機会。世界の広さも感じてしまう。芸術とは？と感じる。

2年前、[紙にお線香の火]それだけの作品に魅了されてしまいました。靴を褒めたら「君に上げるよ」。遊びに行きますと言いながらパリに来てしまい、後悔しています。頑張らないと逆に疲れてしまう人間のようです。窪田先生のご冥福をお祈りいたします。





齊藤さんは 本当に描くことが好きな方だった。訪問中ずっと笑顔でお話下さる姿から一番心に残ったことだった。

子どものころから絵が好きだった少年は、中学校の美術部で表現の喜びに目覚める。あれから60余年、今でも毎日絵筆をとらない日はないという。描くことは生活の一部なのだ。定年後改築されたアトリエは、ご自身設計のお気に入りの場所だ。天井からの採光が柔らかく壁はどこでも釘が打ちつけられるようコンパネを下地にした。3面の壁には数多くの作品が掛けられ、眺めながらいつでも手を加えることができるのがいいのだという。納得いくまで手を加え描く性質で、中には2年がかりになった作品もあるのだという。高校時代は演劇部で活躍された。部長として仲間のため方や道具作りで大工仕事の腕を磨いたと懐かしむ。やがて企業戦士として仕事漬けの生活が始まった。技術系、事務系、営業とあらゆる職種を経験。さらに組合交渉なども経験され、リーダーシップは仕事の中でも十分に発揮された。4千人が同時に食事のできるカフェテリアの建築工事では、言葉では伝わりにくい基礎のイメージを絵で描いて伝えるなど絵は仕事にもずいぶん役立ったようだ。

独学で描いてきた齊藤さんは、会社で初めて絵画部の仲間と描く楽しさを知ったという。指導は小田原ゆかりの作家児玉彦三さん。今まで一人で描いていた時とは異なり、技法や色遣いまたモチーフは次々と変化していく。

1969年7月。記念すべき1回目の個展の記憶は今も鮮烈だ。本棚から取り出してくださったアルバムには当時の展示作品が丁寧に張られ、展示の平面図、作品の下には鉛筆で様々な書き込みがされていた。見に来て下さった先生方から頂いたアドバイスをきちんと記録されていたのだ。<道などにピンクの色を置くと青っぽさが消えるよ>色あせた文字は時間の流れと齊藤さんの絵に対する思いに溢れ私は感動を覚えた。初個展の為に準備した作品は25点。中学校の恩師湯川治郎さんに観ていただくと思わず駄目だしの連続で許可が出たのはたったの4点。個展までの4カ月、寝の間も惜しんで必死に描き上げたときを懐かしむ。依頼毎日描く癖が今も続いているのだという。

1970年市展初参加作品が佳作に入選、西相展議長賞と受賞を重ね、現展（現代美術家協会）で中央デビューを果たす。現在日本美術連盟会員、現展準会員。運営委員として長年財務担当を任されるなど事務能力でも貢献されている。1977年市の買い上げ制度による80号の大作は今も市役所5階に展示され市民を楽しませている。

ご自身を「現地主義」と言い切る。仕事で訪れた土地々々では、合間を見てはスケッチをした。とにかく良く歩かれる。仕事で出張した中国で海外旅行の気軽さにも慣れ、ドイツ、フランス、スイス、イギリス、ヨーロッパやアメリカなど回りながらしだいに外国の風景に惹かれるようになったという。お嬢様のいたアメリカワシントン法務局近くのホテルからスケッチした風景は、今年の西相展で発表されていた。

長年ナイフで描いてきた作品は、いつしか筆に戻り、大好きだった緑は画面から消えていく。色彩を大切にしてきた作風は丁寧な点描による色系統の統一された画面になっていた。

現地主義は6冊の貴重な本にもまとめられている。2001年発行の「小田原百景」は、今も人気のあるかくれたベストセラーだ。小田原を隅々まで歩き画家の目でとらえた景色が特徴的な作品集になっている。街を歩きながら感じた失われていく故郷小田原の姿を残したいと、2002年には続編「道と建物編」も熱い思いが詰まっている。2007年には河口から谷峨までの見所をまとめた酒匂川散歩ガイドブック「酒匂川36景」、2010年には握りかんなや足踏みろくろなど消えていく道具達を惜しむ「小田原伝統工芸匠達の道具」も貴重な資料である。どれも人が好き、町が好きという齊藤さんのお人柄がにじみ出ている作品集だ。今年からは伊勢治オリジナル年賀状も手掛けられた。郷土の小田原城の颯爽たる姿からは小田原を愛する心が伝わってくる

11月17日から、10回目の個展が新九郎で開かれる。金婚式を迎えた奥様への感謝の気持ちを込めた節目の二人展である。平成13年の奥様の歌集「日々の楽句」の出版を記念した二人展は記憶に新しい。音楽に書にとお忙しく活躍される奥様の為に「後かたづけはずっと私の仕事」と楽しそうに話す齊藤さんご夫妻は、仕事を離れた熟年夫婦の理想に映る。

最近小田原市懸案の新ホール建設準備委員会の委員として、小田原の将来を見据えた取り組みにも力を入れている。市民が心豊かに暮らせる街づくりの為に、小田原を愛する齊藤さんに大きな期待を寄せるものは多い。（新九郎友の会 木下和子）



10月のこと

今年1月より毎月、小田原美術館についての懇談会を重ねてきた。新九郎通信でも4月号よりその件についてお伝えしてきた。10回の懇談を重ね貴重な意見も収集でき、井上三綱作品収集にも進展がみられそれなりの成果を得ることができた。そろそろ市民に見える形で進める段階に来たと思われる。とにかく声に出し、官民協働による「小田原に美術館を作ろう」という機運を作っていく。以下簡単な基本的考えを記します。皆さま方のご意見ご感想を是非お聞かせください。

【小田原に美術館を】

小田原市には井上三綱画伯をはじめ、地域で活躍された優れた作家が数多くおります。その作品の保存・収集・研究は郷土の文化を守るという観点から必要不可欠なことと考えます。残念ながら現在それは充分になされていません。また国内で評価の高い小田原ゆかりの作家も多数おります。このような作家の展示会は市民の希望するところ。優れた美術作品を鑑賞し楽しむ、ゆとりと潤いのある暮らし、そのような中から情操に富む心の豊かな人間が育ってくるものだと思います。また次代に続く優れた人材を輩出する事ができると考えます。この希望を満たすためには美術館が必要です。500㎡位の展示施設、適切な保存収蔵庫、美術学会員の採用が是非必要です。近隣市と比べ小田原市の美術行政は立ち遅れており、早急にこの課題を解決すべきと考えます。新市民ホールに展示施設併設の検討がされていますが、施設については新築でなく既存の施設を有効利用することも考えられます。大切なことは単に展示スペースの確保という議論でなく、文化都市としての基本的な政策という新たな視点から検討する課題と捉えるべきであると考えます。㊦

ギャラリー新九郎-西洋美術史セミナーVol. II-

「アートナビゲーターが解説する スペイン プラド美術館の魅力」

講師 瀬戸克信（アートナビゲーター・新九郎友の会会員）
11月20日(土)18:30~20:00 入場料 300円(茶菓付)

申込先 ギャラリー新九郎 木下
E-mail:kinoshita@iseji.net
mobil:090-9324-4084

スペイン マドリッドのプラド美術館

と言えば、ベラスケス、ゴヤといった、スペイン絵画の黄金時代を築いた巨匠の代表作品を始め、3万点以上の収蔵作品を誇るヨーロッパ屈指の美術館。所蔵作品の中から数十点、それ以外の西洋美術史上の重要作品を紹介しながら、近世欧州の中核ハプスブルク王家とローマ・カトリックの関係性など、絵画芸術と歴史背景の意味を、ふんだんな画像やアニメーションで、世界史や地理の苦手な方にも分かり易く解説します。知的エンターテイメントで、芸術の秋の夕べをお楽しみ頂けたらと思います。旅行会社の富裕層向けセミナーで好評だった内容です。

